

福祉人類学における福祉の現場のエスノグラフィーの意義 —2000年以降の主要な研究のレビューを通じて—

The Significance of Anthropological Studies on Social Work Practice.
—The Review of Major Previous Studies after 2000—

福島 令佳（札幌心療福祉専門学校）

I. 序論

1. 関心の所在と研究目的

近年、福祉の現場では既存の価値や支援内容を問う流れがある。当事者に関するものには、当事者主権（中西・上野 2003：3）という言葉の誕生と当事者の側から問題を可視化する当事者運動、当事者が主体となる当事者研究（浦河べてるの家 2005：3）とそこから生まれる新たな支援のスタイルがある。ソーシャルワークの倫理や価値を問うものには、ソーシャルワークの抑圧的内容のほとんどは支配関係を再生産するものである（ドミネリ 2002）という「専門職」への批判、ソーシャルワークのグローバル定義（国際ソーシャルワーカー連盟ほか 2014）の「民族固有の知」を尊重すること等に象徴されるような先住民と支援者の非対称性への批判がある。フェミニズムからは、ひとは傷つき依存して生きるのであり、それは自律的主体の下位概念ではないという批判（岡野 2012）がある。そこで問われていることのひとつは、例えば介護に限定されない広い意味でのケア（気遣い、世話等）の関係性である。そして、既存の支援枠組みを超えた新たな発想が福祉の現場には求められているといえよう。では、どのようにして我々は新たな発想を手に入れることができるのであろうか。どのようにして、支援する側／される側といった二分法をこえてゆくのか、どのようにして、既存の枠組みである「利用者のニーズ把握」という起点から自由になり、他者を理解するという根源に立ち返ることができるのであろうか。そのよう

なことが達成されたとき、どのような福祉の現場の風景が新たに立ち現われてくるのだろうか。本研究では、このような問いに対して、社会福祉学と人類学のディシプリンの垣根を超えた学際的共同研究という営みの中に答えを探求していく。

近年、人類学のフィールドに福祉の現場が選ばれ、人類学の下位領域として福祉人類学が確立されつつある。そこには、エスノグラフィーを得意としてきた人類学が、調査協力者へのフィードバックにとどまらずにより広く、応用人類学の流れのなかで、いかに社会に役立てるのかという課題がある。確かに、人類学の文化相対主義は、多様なニーズの当事者を理解する助けとなる。また、エスノグラフィーによって描き出される福祉の現場の実態は、支援ありきという前提や社会福祉の価値を揺るがし、当事者側から課題を可視化する力がある。エスノグラフィーの手法により福祉の現場を見たとき、どのように見えるのか、その見え方が福祉研究にとってどのような意義があり、また可能性があるのだろうか。本研究の目的は、福祉人類学における福祉の現場のエスノグラフィーを概観し、その意義を示し、可能性を示唆することにある。

2. 研究の背景

福祉分野における学際的共同研究に関しては、ソーシャルワークのグローバル定義（国際ソーシャルワーカー連盟ほか 2014）において、ソーシャルワークは複数の学問分野をまたぎ、その境界を越えていくものであること、人類学などの人間諸科学の理論

を利用するものであることが明記されている。

また、人類学者であるクラインマン（2011）は、DALY（障害調整生存年）を例に出し、社会政策や医療改革などの介入を血の通ったものにするためには、問題をエスノグラフィックなコンテキストでとらえることが重要であると述べている。そして、人文科学、社会科学、健康科学などの学際的な取り組みの必要性を指摘している。その背景のひとつには、近年の人類学の動向として、人類学をいかにして社会に役立てていくのかという応用／実践が重視されていることがあげられる。

福祉人類学という下位領域の存在を示したのは、1990年代のエドガーら（Edgar and Russel 1998）のモノグラフである。そこでは、コミュニティケアから児童福祉などの多様な福祉の現場がエスノグラフィーで描き出されている。老いをテーマに研究している人類学者の高橋（2013）は、福祉を題材に含む人類学的研究は、様々な編著や雑誌論文に散見されるものの、一冊のモノグラフになっているものは非常に少なく、いまだ人類学的下位領域としては成立していないという。しかし、現在の福祉制度は、厚みのある民族誌を記述するに足るテーマであると述べている（高橋 2013）。

日本では2000年代に入ってから、若手研究者を中心に亀井ら（2008, 2011）と内藤ら（2014）のモノグラフ、単著では高橋（2002, 2008a, 2008b, 2009a, 2009b, 2011, 2013）、六車（2012, 2015）等の研究がみられる。また、近年の学術学会においても、福祉人類学への関心は高まっている。2017年の日本文化人類学会研究大会の分科会のテーマには、ケアの現場、児童福祉施設、生活困窮者施設や精神障害者通所施設等、多くの福祉の現場が選ばれている（日本文化人類学会 2017）。そして、若手研究者を中心とした人類学と社会福祉学の共同研究が行われていることもこうした研究動向に影響を与えている。例えば、関西学院大学21世紀COEプログラム『人類の幸福に資する社会調査』の研究—文化的多様性を尊重する社会の構築』（拠点リーダー：高坂健次関西学院大学大学院社会学研究科教授）の一環として「多文化と幸せ」というワー

クショップが行われている。発起人は、国際ソーシャルワークを専門とする武田と人類学を専門とする亀井である（亀井ら 2008）。社会福祉学においても、人類学のエスノグラフィーという手法に着目し、福祉の現場を問い直すという研究が、近年散見されるようになってきた（横山 2013, 茶屋 2016）。

3. 研究方法

本研究で分析対象とするのは、人類学は何ができるのかという社会的なニーズに呼応する形で始まった亀井ら（2008, 2011）や内藤ら（2014）などの若手研究者が中心となって生まれつつある近年の人類学の動向を踏まえた日本における福祉人類学の研究である。エスノグラフィーの手法を役立てたいという近年のこうした人類学の研究動向は福祉の現場にとっての利益をより効果的に見せてくれるだろう。しかし、前節で述べたように福祉を題材とした研究は非常に少なく、本研究では、以下三つの特徴が顕著にみられる亀井ら（2008, 2011）と内藤ら（2014）のモノグラフ、単著では高橋（2002, 2008a, 2008b, 2009a, 2009b, 2011, 2013）と六車（2012, 2015）の研究を取り上げる。三つの特徴とは以下のとおりである。

一つめは、人類学の主要な方法論であるエスノグラフィーを用いていることである。エスノグラフィーとは「人々が生活し実践する具体的な現場に調査者が直接入り込み、一定の期間かかわりを持って、そこで見つけた事象をその文脈も含めて理解し、理論化するための調査研究のアプローチ」（小田 2015: 34）である。つまり、エスノグラフィーとは「現場」に入り込み、内側から理解することを得意としているのだ。それは、支援を必要とする当事者にならなければ、なかなか見えてこない閉鎖的な福祉の現場を外側の人間に向けて「開く」機会となるだろう。同時に福祉の現場で働く人間にとっても、自分たちの状況を紐解く機会となり、新たな発想が生まれる可能性がある。

二つめは、多様なアクターが存在する“福祉の現場”を描き出していることである。また、本研究では以下の文脈で現場という言葉を用いる。小田

(2009) は、現場を発見の場であり、あらかじめ持っている知識や既存の理論では説明できない事柄と出会う、新しい知見が開かれていく『『これまで』と『これから』のあいだで進行し続ける『今』である』(小田 2009: 22) としている。そして、こうした現場性を踏まえてエスノグラフィーするということは、その人はどんな現場を生きているのかというように、生きていることの具体性に立ち返ることであるとしている。また、特定性を特徴とする現場から得られた知見であっても、違った文脈で同じ問題に取り組む仲間がいかなる創意工夫をしているのかを知ることが、現場のリソースになりうるとしている(小田 2009)。

三つめは、エスノグラフィーの特徴(小田 2010)の中でも、参与観察を行うことで、五感を総動員して関わり、現場を内側から理解し、問いを発見していることである。その問いは、あたり前を相対化し、ある世界を内側から理解して、それを別の世界へと伝える橋渡しとなる。そのためには、ディテールにこだわること、非言語的なものごとの意味、あり方、関係性や歴史、政治経済的な文脈をみていくことも必要になる。また、これらから得られたことを概念化することも大事な特徴である。

エスノグラフィーのこうした手法により福祉の現場を見ることで、何が新たに可視化されてきたのかを以下にみていく。

Ⅱ. 福祉人類学における福祉の現場のエスノグラフィー研究

1. 高橋絵里香の研究

老いをテーマとしている人類学者の高橋は、フィンランドでフィールドワークを行い、在宅介護システムを利用する独居高齢者の様子を描き出した。高橋の研究群の特徴は、初期人類学の負の遺産である文化の矮小化と全体性の規範化という課題に対応した分析視角が貫かれていることである。

高橋(2013)の分析視角は3つあり、①制度そのものの社会的背景を分析して、合理化や標準化を強いる権力として記述することを避けること、②個人の

視点・自治体・福祉国家の理念枠組みといった複数のスケールを同時に扱うこと、③一定の領域を分析の枠組みとすることにはどのような意味があるのかを問うていくことである。これによって、「福祉制度の機能性を診断して解決策を提示する語り口を小手、より複雑な記述が可能となる」(高橋 2013: 72)としている。これは、エスノグラフィーの特徴である非言語的なものごとの意味、あり方、関係性や歴史、政治経済的な文脈をみていくことである。

高橋の研究群は、高齢者の日常のエスノグラフィーから、福祉国家フィンランドの老いをどのように描いているのか。三つの分析視角とエスノグラフィーの特徴との関係性からみていく。

高橋(2008b)は「自立のストラテジ——フィンランドの独居高齢者と在宅介護システムにみる個人・社会・福祉」において、福祉制度が実現しようとする人々の「幸福(welfare)」とは全体的な概念として、「ありたい」と願う生活を常に想定しており、高齢者福祉の場合は、人間はどのように老いていくべきかという命題を暗に含んでいるとしている。しかし、高橋によるフィンランドの群島町での詳細なエスノグラフィーは、制度に規定される想定を超えたより複雑な様相を明らかにしている。例えば、転倒・急変時の安心電話という支援をヘルパーへの意思表示、他者とのコミュニケーションに利用する様子が描き出される。この女性は殆ど最後まで自宅で暮らすことができた。そして、この女性の自立生活は、誰の決定でもなく、ホームヘルパーと高齢者のインタラクションの中に形成されたものだと分析している。また、高齢者たちが、誰かとコミュニケーションをとるために、行政の思惑とは異なる転倒・徘徊のフォローシステムの「利用」を行っていること、その必要性をある意味で認めているヘルパーの姿を描写している。

分析視角①の在宅介護システムを「合理化や標準化を強いる権力」(高橋 2013: 72)として記述することを避けることによって、制度が一方向的に与える命題を超えた他者との繋がりを求める営みがみえてくる。このように、高橋はフィンランドの福祉の現場を参与観察し、高齢者だけではなく、ヘルパーや

行政職員の関りや捉え方の違いも描写し、まさにその人がどんな現場を生きているのかという具体性（小田 2009）から、「自立のストラテジー」（高橋 2008b : 150）という概念を導き出した。「自立のストラテジーは、常に曖昧である。その曖昧さこそが、繋がりという形の「幸福」を求める営為としてのエイジング—福祉において、身体—自己の自立をめぐるコミュニケーションを可能にしている」（高橋 2008b : 150）と結論付けている。

このエスノグラフィーによって高橋は、福祉国家の規範としての自立とは対照的に実践の場では、明確に定義できるような自立状態は存在しないと述べている。高橋の研究で興味深いのは、福祉国家といったマクロな視点も含めながらも、それだけでは見えてこない高齢者の老いていく営みが「自立のストラテジー」（高橋 2008b : 150）として描かれ、さらにそれは「曖昧」であると結論付けられていることだ。つまり、高橋（2008b）は、福祉国家が前提とする「自立」を遵守するのでも、抵抗するのでもなく、フィンランドの群島町で在宅福祉サービスを受ける高齢者は、「他者との繋がり」（高橋 2008b : 149）を希求しているというように描いている。その他者には多様なアクターのひとりとして、在宅システムを提供するヘルパーも入る。ヘルパーに同行して高齢者と関係性を築くことで、参与観察によるディテールから、その生活を内側からの理解し、物事の前後の文脈もみている。そして、独居高齢者が転倒・急変時の安心電話を使用する本当の意味を明らかにし、在宅システムの意図と高齢者の意図の“ズレ”を見事に描き出しているのだ。

「老いを歩む—フィンランドの年金生活者達の合宿にみる身体変容への展望—」（高橋 2009b）では、フィンランドにおける一般的な老いのライフコースと実際に老いていく状況の相対性にはどのような関係があるのかを現場から問うている。その現場とは、フィンランドの群島町における年金生活者の合宿である。高橋は、この合宿におけるフィールドワークから、二人部屋に寝起きする参加者たちが互いに協力関係を自然に築いている様子を記述している。腰の悪い相手のベッドメイキン

グをしてあげる参加者の姿や活発で先導的な立場の参加者に対して、受動的立場をとっていた参加者が、歌や詩の朗読の場面では、誰よりも素早く歌いだすというように立場が変わるという様子を描いている。このエスノグラフィーから、デイケアと違って、年金生活者たちの合宿では、ケアギバーとして固定化された役割の人間が少ない分、参加者の能動的な関与が引き出されていることを指摘している。ケアする者がケアされる者にもなりうるという能動／受動関係を詳細に描いているのだ。そうした複雑な状況を描くことによって、地域福祉システムが一方的にライフコースを課しているという図式を覆し、老いは、こうしたケアの関係性にみられるような「状況的相対性に依存している」（高橋 2009b : 485）という研究結果を示している。

また、高橋は「在宅介護—家族／社会という「幸福」を求めて」（高橋 2008a）において理想化されている北欧フィンランドの在宅福祉に対しても疑問を投げかけている。近代国家の福祉制度の自宅での自立した生活を平均的な生活、そして「平均」を「普通」と言い換えるならば、「普通の暮らし」はすべての人間にとって幸せな状態にあるのだろうかを指摘している（高橋 2008a）。

現場を厚く記述することで得られた内側からの問いは、福祉国家の掲げる「平均」という政治的な文脈をみることによって、さらに掘り下げられる。つまり、分析視角の②にあるように近代国家の福祉制度という単一のスケールが示す平均ではなく、「複数のスケール」（高橋 2013 : 72）を重視している。その一つである「個人の視点」（高橋 2013 : 72）が「普通の暮らし」に疑問を投げかけている。それは、以下の研究にも現れている。

高橋（2013）の老いと福祉の研究の集大成でもある『老いを歩む人びと』の中で、フィンランドの群島町の高齢者たちが互いを扶助する行為に関係づけられた構図を示しつつも、「つながりへの懐疑」（高橋 2013 : 256）について言及している。そして他者との交流を望まない「孤独な」高齢者たちが不幸であるのかは判断できないとしている。「単独者としての風貌を備えた彼らの姿は、安易な同情やエンパワ

メントの提言を拒んでいるように思えるからだ」(高橋 2013 : 257) とも述べている。見逃されてしまいそうな「個人の視点」も微細な参与観察によって尊ぶ姿勢が「複数のスケール」による「複雑な記述」を実現している。福祉の支援枠組みならば、この場合は「いかにして、コミュニティの輪の中にこのような“孤独な”高齢者を取り込み、彼らの生活の質を上げていくか」という視点のもとで調査研究は進められていくだろう。しかし、エスノグラフィーの特徴であるディテールや文脈を重視した詳細な描写によって、はじめて彼らの”沈黙“する姿が単に”孤独“としてではなく「単独者としての風貌」(高橋 2013 : 257) としてみえてくる。このように「ニーズ把握」という枠組みでは見えてこない高齢者の姿が人類学の文化相対主義による「他者理解」を起点としたときにみえてくることもある。

分析視角の③一定の領域を分析の枠組みとすることにはどのような意味があるのかを問うていくことに関しては、施設外の文脈にも目を向けることによって、そこで行われていることの意味を自覚することが重要であるという。その中で、「施設内の行事、レクリエーション等はどうな情報源を元に企画され、遂行されていくのか」(高橋 2002 : 336-337) という視点を持つ必要があると述べている。そして、老年人類学と福祉の人類学の意義は、現代システムに取り込まれ、意図的に創出された共同体制の本質を明らかにすることであると主張している(高橋 2002)。その意味を問うことによって、分析結果がどのように受け止められるかにも留意すべきであると以下の指摘が示している。

「<在宅>の思想—フィンランドの南西部の地域福祉にみる市民社会の範疇とエイジング」においても、「結果として成立している地域福祉のシステムをある種の『成功した事例』として紹介することは、福祉国家運営のグローバルな潮流やローカルガバナンスを推進する地域中心主義的論理を研究者自身が肯定していると受け取られかねない」(高橋 2011 : 71) ことに触れている。よって、現代世界の人類学は、より視野を拡大した記述を求められると同時に分析概念の規範性を再考する理論的反省の態度が求

められると指摘している(高橋 2011)。

このように高橋は、エスノグラフィーの特徴である文脈を重視する姿勢を調査研究に活かすだけではない。上記のように明確に自身の立場を示すことによって、自分の研究がどのような文脈に位置づけられるのかを認識し、研究の持つ影響力にも配慮している。

高橋は理想的な福祉制度の追求や在宅介護に対する価値の至上性という一面的なものの見方で、結論付けることはせずに、制度の思惑と現場の営みのせめぎあう様相から疑問を投げかける姿勢を貫いている。文化の矮小化や全体性の規範化に対抗する三つの分析視角を持つことによって、エスノグラフィーの特徴である多様な文脈や他者理解の立場からの「複雑な記述」による福祉の現場が描き出された。これによって、われわれは、従来の社会福祉研究の制度研究では、浮かび上がらせることが難しかった現場の自立の曖昧さ、福祉国家が掲げる在宅生活という価値と「他者との繋がり」(高橋 2008b : 149) を求める高齢者の真意の“ズレ”や一方で他者との交流を望まない存在から「つながりへの懐疑」(高橋 2013 : 256) をみることができる。

2. 六車由美の研究

高橋が実践サイドと距離を置いた研究を行ったのに対して、実践家となって、介護の現場を民俗学的に研究したのが六車である。六車の研究の一つ目の特徴は、実践サイドに身を置いたことで、重度の認知症の方に対して何ができるのかという想いから生まれた。それは、エスノグラフィーの特徴である参与観察とクリフォード・ギアーツの「分厚い記述」等のディテール描写の醍醐味が生かされるというものである。このような人類学の参与観察や記述の技術は、介護の現場での利用者、特に認知症の利用者への理解に応用できそうだと述べている(六車 2012)。

利用者の「ハルさんに寄り添って歩き、その様子を見守り、できるだけ詳細に記録を重ねていくと、帰宅願望にはハルさんなりの理由があるように思えてきた」(六車 2012 : 88) という記述がある。“一

方的にしゃべり、内容に脈絡がなく「たそがれ症候群」によって徘徊する当事者” というものの見方で収まってしまいがちな状況であり、六車自身もそういうイメージをもって、関わっていた。しかし、聞き書きで何かできないかという想いから、その手法を用いて、語る言葉で、聞き取れるものをとことん記録し、人生訓が多いことを導き出した。そして、参与観察から浮かび上がった他者のことを気にかけているという生活文脈と照らし合わせて解釈した。それによって、「不穏」というレッテルを貼られたハルさんは、「家族思いで、心配性で、そしてユーモアあふれる魅力的なおばあちゃん」（六車 2012：91）というように現場でのイメージが変わり、六車との支援関係も変わったことを伝えている。

この事例から、介護の現場において非言語的な「受容」「傾聴」に重きが置かれ、イメージが作られると、それ以上の「利用者理解」を深める突破口を見つけるのが難しくなる構造が浮かび上がってくる。このような語られる言葉が聞かれない現場において、「語られる言葉」を徹底的に記述し、その人の生活の文脈から解釈し、驚き、より観察を深めることで、一見バラバラで見過ごされてしまう「語り」に世界があることが分かってくる。このズレを描き出すことによって、「利用者のニーズ把握」という既存の支援枠組みでは見えてこなかった他者としての姿がみえてくる。エスノグラフィーの手法そのものが実践方法としての可能性を有しているともいえよう。

二つ目の特徴は、話者に教えを請うという聞き書き独特の姿勢である。六車は、話者、つまり利用者に「教えを請う」という関係性は介護の現場でどのような意味を持つだろうか（六車 2012）と問いかけている。六車（2012）は社会福祉士の養成テキストを取り上げて、ソーシャルワーカーが言語的コミュニケーションよりも非言語的コミュニケーションを過剰に重視していることに疑問を呈している。ソーシャルワークで重視されている「傾聴」に関しても、応答技法に重きがおかれ、「語られる言葉が示す内容そのものよりも、『言葉のなかに隠された利用者の気持ち、想い、心の動き』を『察する』こと」（六車 2012：98-99）が目的とされているのではないかと指摘し

ている。例えば利用者のお話を聞くという点では同一だが、回想法と聞き書きは根本的な違いがある。そのひとつは、関係性であるという。回想法では、利用者の行動の変化を「促す側」と「促される側」になる。つまり、非対称性が生まれる。これに対して、民俗学の聞き書きは、話者を尊重し、教えを請う姿勢で、相手の言葉を聞き、書き留める。相手の生活や文化を理解するという民俗学の手法が認知症の利用者への対応においても有効であるとしている。徘徊を繰り返していた正さんという利用者が聞き書きを重ねるごとにじっと席に座り、「しょうがないなあ」と言いながら説明をしてくれたエピソードを紹介している。この話を聞いた介護現場の反応はよくこれだけ聞き出した、そもそも認知症の方の言っていることを丁寧に聞こうとしたことがすごいというものだったという。それに対して六車は、介護の現場では、認知症の利用者の「心」や「気持ち」を察することを行っているが、語られる言葉を聞こうとはしてこなかったということなのだろうかかと問を投げかけている。認知症の利用者の言葉は、一見すると脈絡もなく、意味のないものとみなされがちであると指摘している。「語られた言葉を言葉通りに理解すること、もしかしたら認知症の利用者たちもそう望んでいるのではないだろうか。」（六車 2012：111）と述べている。

三つ目の特徴は、文化の矮小化や全体論の規範性に対応し、認知症高齢者の生きる姿に接近していることである。2冊目の『介護民俗学へようこそ！「すまいるほ一むの物語」』（六車 2015）では、利用者の故郷、時代が反映された思い出の味を再現する行事、踊りの得意な利用者に行事ごとに振付を依頼する、灯籠流しによって亡くなった利用者や家族の死を悼むこと等が描かれている。それは、外側から支援側が考案し、「家族」「地域」「伝統」「文化」の称揚を図るものではなく、聞き書きによって、明らかになった当事者の想いから生まれた支援であることが記述から伝わってくる。特に死を悼むことに関しては、従来利用者の死をタブー視してきた福祉の現場への重要な投げかけである。現在はようやく福祉の現場でも利用者の死が取り上げられるようになってきた

が、六車の実践はさらに積極的に当事者とともに職員も「死」というものをどう受けとめ、乗り越えていくのかについて大きな示唆を与えてくれる提言になっている。

六車 (2012) は、人類学の参与観察による「分厚い記述」や民俗学の話者を尊ぶ姿勢によって、“認知症による脈絡のない話”としてその言葉を退けることなく、利用者の発する言葉を尊重し、その世界に“驚き”，「お年寄りの経験知を尊重する」（六車 2015 : 282）ことによって、高齢者福祉の介護の現場をより“開かれた場”にすることを試みているといえよう。

3. 亀井らの研究

先述したように、若手研究者が中心の亀井らの研究は、実践サイドに身を置き、エスノグラフィーの特徴である不確実性・即興性・偶発性といった“現場の現場性”を重視している。何が起こるかかわらないなかで、五感を総動員した参与観察をしながら、自分自身の存在がどのように受け入れられ、その役割が変化していくのかといった“調査の文脈”を描き出している。それによって、これまでの社会福祉などの専門性を軽視するのではなく、「専門性を活かしつつも、その支援技術の束をいちどフィールドでほどいてみて、場の状況に応じて組み立て直す」（亀井・小國 2011a : 10）という柔軟な支援スタイルの提案をしている。その結果、社会福祉などの実践をいっそう効果的かつ魅力的に世界中のフィールドに置き直すことができるのではないかと述べている。（小國・亀井・飯島 2011）。

『アクション別フィールドワーク入門』（亀井ら 2008）という本では、ふみだす・まきこまれる・分かちあう等のアクション別に、まさに五感を総動員したフィールドワーカー自身のその時々感情が豊かに描き出されている。そこでは、“ふみだす・まきこまれる”といったアクションに表現されるように、エスノグラフィーの特徴である素材を活かすことが行われている。フィールドワーカーは、現場で出会う事象やデータを活かすために、対象が主で方法が従という姿勢で、現場の出来事に柔軟に反応してい

る。その後、亀井はさらに実践とフィールドワークのつながりを重視した『支援のフィールドワーク開発と福祉の現場から』（小國・亀井・飯島 2011）を刊行している。「3章 精神障害をもつ人たちの隣へ」（間宮 2011）を担当した間宮は、精神障害のあるべてるの家のメンバーと国際会議に参加した際、間宮自身も含めてみんなでパニックになってしまったこと、空腹や脱力感に見舞われたこと、お互いに意思疎通が難しいところで強がり、言葉を詰まらせ、慰め合うという予想しえない“現場の現場性”を描き出した。間宮はまさに“五感を総動員した参与観察”を行うことで、自分自身の感情も記述し、自分の存在を振り返ることで、“調査の文脈”を描いた。協力し合ってプレゼンをやり終え、「濃密な経験の共有者」（間宮 2011 : 72）となったことで、支援の場の構図や障害を持つ人の隣にいるための自分自身の姿勢がはっきりとみえるようになったとしている。そして、自分がどのポジションに立つかによって、「障害」、「苦悩」や「病い」との出会い方や見え方も変化するとしている。このように、“調査の文脈”を記述することによって、その場にいる一人一人が、現実構築のリソースになる可能性を持っていることを指摘している（間宮 2011）。

同様に、「4章 音声言語と手話のはざま」（亀井 2011）を担当した亀井の研究も自分自身の存在がどのように受け入れられ、その役割が変化していくかといった“調査の文脈”を重視している。エスノグラフィーの特徴である現場を内側から理解し、そこから問いを発するという点に関しては、当事者を尊重する姿勢が求められる。亀井は丁寧にフィールドに入り、ろう者の当事者との関係性を築き、その文脈も記述し、重要視している。亀井は、言語学的に意義深いことであっても、その国のろう者を取り巻く状況を知らずに調査・発信することは、現地の政府とろう者の力関係のバランスを崩し、多くのろう者を怒らせ、混乱させる事態を招きかねないと指摘している。そして、その構図は、1か月間暮らして数え切れないほどの人たちと手話で語り合う中で見てきたのだと述べている。さらに、関係性を築くための途中の過程を明らかにすることは、よ

い方法を真似る、得られた教訓を一般化するうえで役に立つと指摘している。当地で話されている手話の調査などの目に見える活動は、お酒を飲みながらのおしゃべりといったような日常的なやりとりから生まれるという生活の文脈が具体的に示されている。亀井はレクチャーをしたら、ずっと黙り、ろう者の当事者たちが手話の本を作ろうなどと夢を膨らませると具体的な提案をして、時には「便利屋」となって奔走する（亀井 2011）。このように、思いの共有に至るまでの相互作用的なかわりこそが、次の所作を生む原動力を培っていること、支援の場では、そういった力を生む過程に手を貸すことが重要ではないだろうかと述べている（小國・亀井 2011b）。

4. 内藤・山北らの研究

「応用／実践人類学」が福祉の現場を選択する流れは、内藤・山北らの研究（内藤ら 2014）にみられる。彼らによる国立民族学博物館のプロジェクト、若手研究者の共同研究「〈アサイラム空間〉の人類学—社会的包摂をめぐる開発と福祉のパラダイムを再考する」では、障がい者福祉施設、児童福祉施設などの「全制的施設」（Goffman 1961）とそれにかかわる地域社会や制度などが複雑に絡み合うことで形成される包摂と排除の入り組んだ空間を「アサイラム空間」と概念化した。このように、現場を内側から理解し、問いを発見して概念化するというエスノグラフィーの三つ目の特徴（小田 2010）が顕著にみられる。『社会的包摂／排除の人類学 開発・難民・福祉』（内藤ら 2014）では、序章と終章以外の全ての章のタイトルが問いになっている。そして、当事者の生の営みが概念化されている。

「第 10 章 野宿者の日常的包摂は可能か」（山北 2014）を担当した山北は、制度からもれた野宿にとどまる人びとに対して我々はいかなる応答をとることができるかと問うている。野宿者が地域の子もたちと交流を持っている・子どもを野宿者に預ける親もいる・一方で苦情や嫌がらせを受けたこともあるというエピソードを紹介している。そういった本来結びつかない社会関係であるが故の交流を「ひかえめな交流」（山北 2014 : 212）と概念化している。

さらに、制度的包摂に対して、贈与・支援・交流などの何かしらの社会的行為を契機とした営みを「日常的包摂」（山北 2014 : 201）と概念化した。日常的包摂の原理と制度的包摂の原理は完全に分離していないという。一見制度・アサイラムから逃避している野宿者は制度的包摂から逃れているようでも、他者の介入・接触を避けることはできず、野宿の当事者自身も支配的な慣習を内面化し、引け目を感じていることを指摘している。だからこそ、山北が描き出したエピソードは、法外でも無法でもない日常的包摂という困難と様々なかたちで向き合う人びとの姿を浮かび上がらせている（山北 2014）。これによって、「支援が必要なのに、制度的包摂から逃れた野宿者」という見方から解放され、「排除が完結しない、完全な包摂でもない—野宿者の日常的包摂」（山北 2014 : 201）の営みをみることができる。

「第 11 章 精神障害者の世界は受け入れられるのか」（間宮 2014）を担当した間宮は、浦河べてるの家を拠点としたフィールドワークから、現場を内側から理解して、問いを発見している。それは、精霊や神々などの民俗宗教は非科学的なものとして医学や福祉の支援パラダイムから排除されてきたこと、幻聴や妄想を取り入れた文化装置は、国内では一部の地域や宗教にしかないことに触れ、彼・彼女たちの体験していることを社会がどう受けとめているかを問うている。そのような発想は間宮が参与観察によって、共に生活し、彼・彼女たちが外の環境や言葉に敏感で影響を受けやすい、やわらかい身体を生きていることを知ったことによる（間宮 2014）。医療や福祉のパラダイムでは、非科学的とされる精神障害者の感受性を「やわらかい身体」（間宮 2014 : 220）と概念化することで、幻聴・幻覚の世界を支援の対象とのみとらえるのではなく、むしろわれわれがどう受け止めていくのかという姿勢を問うているのである。これは、間宮の指摘するように従来の主な「福祉の支援パラダイム」にはない視点であるといえよう。誰が誰を包摂するのか、むしろ包摂されるべきなのは健常者の世界なのではないかという問いを持つことも可能である事を思い出させてくれるのである。

「第12章 脱施設化は真の開放を意味するのか」を担当した有菌は、ハンセン病者の運動と実践は、隔離政策の不当性を告発しつつ、療養所という生活の場を防衛し、拠点として活動を展開することで現状の変革を試みるものだったと述べている。そして、彼らは自らに押し付けられた「動けないこと（移動不可能であること）」という条件を「動かないこと」という手段で取って返すことで、制度の要求をはねのけ、自らの住処である療養所を守ろうとしたこと、このような状況を目的へとってかえすポジティブな展開の契機はどこにあるのかを問うている。それに対して、彼らは自分たちの側から、切断する線を絶えず引き直し、不可侵の効果を招来させるための結界を作り、自らのおかれた条件を肯定的なものへと転じていったと結論付けた（有菌 2014）。排除されてきたハンセン病患者たちが、療養所を守ろうとした「ポジティブな展開の契機」（有菌 2014：236）を「不可侵の効果」（有菌 2014：236）と概念化している。こうした視角も、隔離された人びとをどのように支援するかを思考の起点とする研究にはみられないものであるといえよう。社会的包摂を価値として掲げているソーシャルワークにとって、福祉人類学のこのような問いの提起は、支援の前提を問う契機となりうるといえよう。

Ⅲ. 結論

人類学的エスノグラフィーを通じて、福祉の現場はどのように見えただろうか、その見え方にはどういいう意義があるだろうか。その大きな意義は、課題を示し、安易に現場を批判する事よりも、ものの見え方を提示することにある。それは、人類学者が現場から「言葉を与えられた」（波平ら 2010:138）と評価されることに現れている。本論で取り上げた実践サイドと距離を置いた高橋の研究では、権力を一方的に批判する立場や地域中心主義的論理と距離を置くことで、高齢者の老いていく姿を「自立のストラテジー」（高橋 2008b:150）と概念化した。これによって、福祉国家が掲げる在宅生活という価値とつながりを求める独居高齢者の真意の”ズレ“という

様相を示した。一方六車は、実践サイドに身を置き、自ら支援者として苦悩する中で、非言語的な「心」を受容することに重きを置く介護の現場と「語られた言葉」（六車 2012:111）をそのまま聞いてほしい認知症高齢者の間の”ズレ“を見事に描き出した。また、間宮は支援者という役割ではなく、当事者とともに一人の人間として一から関わったことで”非科学的“とされる精神障害者の感受性を「やわらかい身体」（間宮 2014:220）と概念化した。これによって、精神障害者の世界が感覚的に身近で肯定的な印象へと転化される。そして、あたり前とされる前提に対して、誰が誰を包摂すべきなのかを問う新たな発想へと導かれる。このように、福祉人類学といってもそのアプローチは多様であり、その分だけ多様に開かれていくという意義があるといえよう。これらの概念化は、調査者自身の五感といった身体的な関りが生み出すものである。そういった意味でも、日々五感を使っているソーシャルワーカーや当事者等を含めた福祉現場との共同研究が重要になる。

最後に福祉人類学の今後の課題と展望を述べておきたい。ここ20年で人類学研究の領域は西洋の多文化主義から「自然の単一性と絶対性を転覆する」（石倉 2016:316）という“多自然主義”（Viveiros de Castro 2005）や「人間という種を超えた範囲に民族誌的な記述を拡張しようとする」（石倉 2016:316）といった“マルチスピーシーズ人類学”（Kirksey and Helmreich 2010）によって大きく拡張し、コミュニケーションの領域を人間だけでなく非人間の世界へと広げる新しい特徴がある（石倉 2016）。しかし、今回取り上げた研究で論じられている福祉現場には、支援者や利用者、制度政策や社会的な文脈、地理的な条件や経済情勢などは描かれていたが、人間と自然のインタラクションをみていく文脈は見当たらない。例えば、高橋（2013）の研究では、フィンランドの高齢者が自分たち以外の住人がいない島に住み続けることを希望した事例、住宅周辺の植物の情報や海の近さなどの自然環境の豊かさが強調されている住宅広告が紹介されている。マルチスピーシーズ人類学の視点を得たならば、島の自然や住宅周辺の植物との交流や

互いをケアしあう様子を描くことで、人間のみの視点では捉えきれないフィンランドの高齢者の老いの様相が明らかになるかもしれない。今後は、人間が自然を見ているように自然も特徴的な視点から人間を見ているという視点、そしてその自然は、比較的感情表現が見られやすい動物だけではなく、植物たちも含まれるという視点が求められる。これらの理論枠組みが加わることで、福祉人類学のエスノグラフィは、人間が人間とだけではなく、植物や動物とケアしあう様相といったより多様なケアの関係性を描き出し、山積した課題の陰にある福祉の現場の豊かな風景を描き、新たな発想へと導いてくれるだろう。

文 献

- 有蘭真代 (2014) 「脱施設化は真の開放を意味するのか」『社会的包摂／排除の人類学 開発・難民・福祉』内藤直樹・山北輝裕 (編), 昭和堂, 228-242.
- 茶谷智之 (2016) 「複数の関係性を媒介としたスラム住民の交渉可能性: デリー・スラム地域における生活 環境向上の試み」『社会福祉学』57 (2), 93-105.
- Dominelli, L. (2002) *Feminist Social Work Theory and Practice*. Palgrave Macmillan. (=2015, 須藤八千代訳『フェミニスト・ソーシャルワーク: 福祉国家・グローバリゼーション・脱専門職主義』明石書店.)
- Edger, I and Russel, A (1998) *The Anthropology of Welfare*. Routledge.
- Goffman, E. (1961) *Essay on the social Situation of Mental Patients and Other inmates*, Doubleday and Company, Inc. (=1984, 石黒毅訳『アサイラム 施設被収容の日常世界』誠信書房).
- 石倉敏明 (2016) 「今日の人類学地図 レヴィ＝ストロースから「存在論の人類学」まで」『現代思想』44(5), 311-323.
- 飯嶋秀治 (2011) 「日本の児童福祉施設で」『支援のフィールドワーク』世界思想社, 37-53.
- 亀井伸孝 (2011) 「音声言語と手話のはざままで」『支援のフィールドワーク』小國和子・亀井伸孝・飯島秀治 (編) 世界思想社, 76-98.
- 亀井伸孝・武田丈 (編) (2008) 『アクション別フィールドワーク入門』世界思想社.
- 亀井伸孝・小國和子 (2011a) 「はじめに 支援のある風景を描く」『支援のフィールドワーク』小國和子・亀井伸孝・飯島秀治 (編) 世界思想社, 1-11.
- Kirksey, S. Eban and Stefan Helmreich (2010) “The Emergence of Multispecies Ethnography” *Cultural Anthropology* 25 (4):545-576. (=2017, 近藤秋秋訳「複数種の民族誌の創発」『現代思想』45(4).96-127).
- Kleinman, A. (1997) *Social Suffering*: University of California Press. (=2011, 坂川雅子訳「苦しむ人々—衝撃的な映像—現代における苦しみの文化的流用」『他者の痛みへの責任 ソーシャルサファリングを知る』みすず書房, 1-31).
- 国際ソーシャルワーカー連盟・国際ソーシャルワーク学校連盟 (2014) 日本社会福祉教育学校連盟・社会福祉専門職団体協議会 (訳) 『ソーシャルワークのグローバル定義 (日本語訳版)』
- 間宮郁子 (2011) 「精神障害をもつ人たちの隣へ」『支援のフィールドワーク』小國和子・亀井伸孝・飯島秀治 (編) 世界思想社, 58-75.
- 間宮郁子 (2014) 「精神障害者の世界は受け入れられるか」『社会的包摂／排除の人類学 開発・難民・福祉』内藤直樹・山北輝裕 (編), 昭和堂, 216-227.
- 六車由美 (2012) 『驚きの介護民俗学』医学書院.
- 六車由美 (2015) 『介護民俗学へようこそ! 「すまいるほーむ」の物語』新潮社.
- 内藤直樹 (2014) 「「社会的包摂／排除」現象への人類学的アプローチ」『社会的包摂／排除の人類学 開発・難民・福祉』内藤直樹・山北輝裕 (編), 昭和堂, 1-13.
- 内藤直樹・山北輝裕 (編) (2014) 『社会的包摂／排除の人類学 開発・難民・福祉』昭和堂.
- 波平恵美子・小田博志 (2010) 『質的研究の方法—いのちの現場を読み解く』春秋社.
- 中西正司・上野千鶴子 (2003) 『当事者主権』岩波新書.
- 日本文化人類学会 (2017) 『第51回研究大会 大会

- 日程プログラム』.
- 小田博志 (2009) 「「現場」のエスノグラフィー—人類学的方法論の社会的活用のための考察—」『健康・医療・身体・生殖に関する医療人類学の応用的研究』国立民族学博物館調査報告 85, 11-34.
- 小田博志 (2010) 『エスノグラフィー入門 <現場>を質的研究する』春秋社
- 小田博志 (2015) 「文化人類学と質的研究」『文化人類学』医学書院, 25-50.
- 岡野八代 (2012) 『フェミニズムの政治学 ケアの倫理をグローバル社会へ』みすず書房
- 小國和子・亀井伸孝 (2011b) 「おわりに 支援からみえるフィールドワーク」『支援のフィールドワーク』小國和子・亀井伸孝・飯島秀治 (編) 世界思想社, 235-244.
- 小國和子・亀井伸孝・飯島秀治 (編) (2011) 『支援のフィールドワーク』世界思想社.
- 高橋絵里香 (2002) 「ナーシングホーム民族誌の展開」『民族学研究』67 (3), 328-339.
- 高橋絵里香 (2008a) 「在宅介護—家族/社会という「幸福」を求めて」『人類学で世界をみる—医療・生活・政治・経済』春日直樹編, 有斐閣, 3-19.
- 高橋絵里香 (2008b) 「自立のストラテジー—フィンランドの独居高齢者と在宅介護システムにみる個人・社会・福祉」『文化人類学』73 (2), 133-154.
- 高橋絵里香 (2009a) 「福祉<社会>と人類学—二〇世紀福祉思想にみるホリズム」『社会人類学年報VOL-35 2009』村武精一・松園万亀雄監修, 33-56, 弘文堂.
- 高橋絵里香 (2009b) 「老いを歩む—フィンランドの年金生活者達の合宿にみる身体変容への展望—」『文化人類学』74 (3), 478-488.
- 高橋絵里香 (2011) 「<在宅>の思想—フィンランドの南西部の地域福祉にみる市民社会の 範域とエイジング」『国立民族学博物館研究報告』36 (1), 35-76.
- 高橋絵里香 (2013) 『老いを歩む人びと—高齢者の日常からみた福祉国家フィンランドの民族誌』勁草書房.
- 上野千鶴子 (2011) 『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』太田出版.
- 浦河べてるの家 (2005) 『べてるの家の「当事者研究」』医学書院.
- Viveiros de Castro, Eduardo (2005) *Perspectivism and Multinaturalism in Indigenous America in THE LAND WITHIN -Indigenous territory and perception of environment*, pp36-74. (=2016, 近藤宏訳「アメリカ大陸先住民のパースペクティヴィズムと多自然主義」『現代思想』44(5)41-79).
- 山北輝裕 (2014) 「野宿者の日常的包摂は可能か」『社会的包摂/排除の人類学—開発・難民・福祉』内藤直樹・山北輝裕 (編), 昭和堂, 200-215.
- 横山登志子 (2013) 「虐待問題を抱える母子の生活支援における「多次元葛藤」—支援者の経験的側面からみた子ども虐待の状況特性—」『社会福祉学』54 (3) : 16-28.